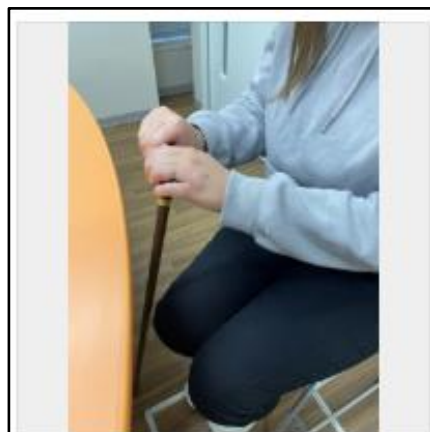


新型コロナ後遺症の発症メカニズム、一端を解明 米研究チーム

2025. 07. 15 毎日新聞



新型コロナウイルス感染症の後遺症で、歩くのもつらい症状に悩まされた女性保育士＝大阪市で2023年1月10日、渡辺諒撮影

新型コロナウイルス感染症の後遺症について、発症のメカニズムの一端を分子レベルで解明したと、米スタンフォード大の研究チームが米科学アカデミー紀要で発表した。細胞のエネルギー源を作り出す器官に異常をきたし、倦怠（けんたい）感などを引き起こしていることが示唆された。診断法や治療法の確立につながると期待される。

国内外のさまざまな論文によると、後遺症は新型コロナで入院した患者の50～70%、入院しなかった人でも10～30%に表れる。疲れやすさや頭がぼんやりする「ブレンフォグ」、筋肉痛などが数カ月から数年続くとされる。発症のメカニズムはよく分かっていなかった。

後遺症患者では体内で炎症が長く続く兆候があることから、チームは免疫細胞に着目。健常者25人と後遺症患者20人などの血液を分析した。

その結果、後遺症患者では、免疫細胞のリンパ球で、酸化ストレスが高まり、細胞内のエネルギー源を作り出すミトコンドリアが損傷していた。体内で利用できるエネルギーが枯渇するため、倦怠感などを引き起こしていると示唆された。

ミトコンドリアに損傷を引き起こすメカニズムは、男女で異なっていることも分かった。女性は体内で活性酸素が増えたのに対し、男性では増えていなかった。男性は活性酸素を効果的に無毒化できなくなっていることが要因と考えられた。

活性酸素などを対象にした診断法や治療法につながる可能性がある。チームは「感染初期にウイルスを排除するため、活性酸素がリンパ球などを働かせるが、ウイルスをうまく排除しきれず、過度に活性状態が長引くことで後遺症につながると考えられる」としている。【渡辺諒】

コロナワクチン「予防効果あまりない」は本当？ 尾身先生を直撃した

2025/6/26 11:00 毎日新聞

政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会で会長を務め、最も頻繁にニュースに登場した新型コロナの有識者でもある尾身茂さん（76）。民放のテレビ番組に出演した際の、コロナワクチンについての発言が波紋を呼んでいる。

「感染を防ぐ効果はあまりない」「若い人は感染しても重症化しない。本人たちが（接種を）やりたいならどうぞと、我々は何度も言っている」

尾身さんが本当にこんなことを言ったのだろうか。真意が知りたいと思い、尾身さんに取材を申し込んだところ「コロナ対策に深く関わった者として、共通理解を得られるようにするのが務めだと思っている」と応じてくれた。

「うそつき」「後出しジャンケン」

まずは6月8日の読売テレビそこまで言って委員会 NP での発言を振り返ってみたい。

＜ジャーナリストの須田慎一郎氏 本当にこのワクチン、特に mRNA タイプのワクチンを信用して、信賴していいのか、ぜひ伺いたいんですけども。＞

尾身さんは「ワクチンの副反応は我々の分科会ではなく、厚生労働省にあったワクチン分科会でやっていた」と前置きした上で、こう答えた。

＜尾身さん 私見を申し上げますと、有効だったかどうかという話を結論から言うと、感染防止効果、感染を防ぐ効果は残念ながらあまりないワクチンです。＞

尾身さんは「高齢者における重症化予防効果は間違いなくある」と続けたが、交流サイ

ト（SNS）ではこの発言を切り取った動画などが拡散し「うそつき」「手のひら返しだ」と批判の声が上がった。

さらに、若者へのワクチン接種についても説明した。

＜医師の森田豊さん 現時点で、若い人たちに対してワクチンを打つかどうかに関し
て、尾身先生のいわゆる私見を述べてもらいたい。＞

＜尾身さん それはもう私は、私見だけじゃなくてこれは分科会の会長として公に何度も言っています。途中から、これは若い人は感染しても重症化しないし、比較的副反応が強いから、これについては、本人たちがやりたいんならどうぞ、と。＞

これに対し SNS では「聞いたことがない」「話が違う」「後出しジャンケンだ」と批判が湧き起こった。

こうしたやりとりについて、尾身さんを直撃した。

「当初は期待していた」がカットされた

——まず、なぜこの番組に出演しようと思ったのでしょうか。

◆当該番組から、コロナ対策が有効だったか、ワクチンの効果がどれほどだったのかなど、コロナを総括するということで出演を依頼されました。

こうした問いに対する答えはそれぞれの立場や価値観によってさまざまで、それ自体は健全だと思っています。

ですが対話がなされず、共通理解がなされていないと感じたため、これまでに得られた知見や客観的事実を共有した上で話し合えば、人々の間である程度の共通理解が得られ、次のパンデミックの備えにつながるのではと考えました。

そのためには、コロナ対策に深く関わりさまざまな知見・データなどを知り得た立場にあった者として、少しでも役立てればとの思いで出演要請を受けました。

——「コロナ禍では正反対のことを言っていた」という批判をどのように受け止めましたか。

◆それぞれの立場や価値観が違うので、同じ情報でも受け止め方が違うこともあり得ます。危機が長く続いた時のコミュニケーションの難しさを感じています。

——改めて、新型コロナワクチンの効果についてお聞かせください。

◆ワクチンの効果については、分かりやすいようにある意味対照的だった「重症化予防効果」と「感染予防効果」を番組でも分けて話しました。

重症化予防効果はかなり高いことが分かっていました。

例えば、オミクロン株対応ワクチンのエビデンスとして、60 歳以上の方については接種者は、未接種者より入院を防ぐ効果（入院予防効果）が 44・7%高かったというのが国内の報告です。

海外報告においても 60 歳以上および 18 歳以上の方について、それぞれ 70.7%、62%の入院予防効果があるともされています。

一方感染予防効果については、2021 年当初はワクチン接種をするとほとんどの人が感染を免れることが期待されていました。

しかし 21 年 9 月以降、国の審議会などの評価として重症化予防効果は高いが、感染予防効果は一定期間認められるものの時間とともに減弱すること、またワクチン接種者でもコロナに感染することがあること、重症化は防いでも他の人への感染が一定程度起こること、などが指摘されました。

残念ながら、当初期待していたほどの効果はなかったという趣旨の私の発言は、今言ったような科学的知見を基にしたものです。

なお、当該テレビ番組は生放送ではなく時間枠に収まるよう編集されていて、収録時に発言した「当初は期待していた」という部分は放映されませんでした。

当然ですが、ワクチンの効果に限界があったもののゼロというわけではなく、一定程度

の効果が存在したことは確認されていて、これを受けてワクチン接種が広範に実施されました。

若者「接種を促していた時期もある」

——若者の任意接種について、番組パネリストや一部視聴者との認識にズレが生じたのはなぜだと考えますか。

◆ワクチン接種の対象者や、努力義務か個人の判断か、つまり公的関与（接種対象者の努力義務や自治体ごとの接種勧奨）をどの範囲で適用するか、についても議論されてきましたが、予防接種の実態は、積み上がった科学的知見を反映して適宜見直しが行われました。

具体的には、ワクチン接種が開始された21年2月ごろには若年層でも重症化・死亡するケースが少ないながらも発生しており、若年者を含め広く公的関与の対象となりました。

しかし、オミクロン株の流行後になると、感染予防効果の持続期間は限定的である一方、高齢者などの重症化予防効果は比較的長く維持されることが分かってきました。

このため22年春に開始した接種（22年5月に開始した4回目接種）では、若年層を接種対象外としました。

ただし、22年秋の接種では、オミクロン株対応2価ワクチン導入により、感染予防効果の改善が期待されたので、全年齢を対象としました。

しかしその後、オミクロン株対応ワクチンの追加接種による感染予防効果の持続期間が限定的との知見もふまえ、23年春開始の接種においては若年者（基礎疾患のある人などを除く）は接種の対象外としました。

また、23年秋に開始された接種では、若年者には接種機会を与えつつも、公的関与については65歳以上あるいは基礎疾患を有する者に限定され、若者は努力義務など公的関与の対象外になりました。

以上が、パンデミックの途中から、若年層が公的関与の対象外、（接種を受けるかどうかは自由意思、という意味での）いわゆる任意接種になった経緯です。このため若者に対し、接種を促すことはあっても義務だとは言わなくなりました。

——今一度世間に伝えたいことや今後の発信について、お考えはありますか。

◆一市民として（新型コロナか他の感染症にかかわらず）パンデミックはまた発生する可能性があります。私たちは新型コロナで多くのことを学びました。次回はその教訓を生かしたいと思っています。

厚労相「コメント差し控える」

一方、テレビ番組における尾身さんの発言について、福岡資麿厚生労働相は17日の記者会見で「尾身先生のテレビ番組出演については承知していますが、尾身先生個人の見解に基づく発言に対するコメントについては、差し控えさせていただきたい」と述べた。

その上で、ワクチンの感染予防効果については「オミクロン株流行下の知見として、重症化予防効果及び感染予防効果はそれぞれ確認されているものの、これまでも周知してきた通り、重症化予防効果は一定程度持続する一方で、感染予防効果の持続期間は限定的であるとされている」とした。

また、若者への接種については「効果の持続期間に関する知見や、高齢者等において重症化しやすいといった知見を踏まえ、審議会で議論を行い、その時点の科学的知見も踏まえ、適宜接種対象等の見直しが行われてきたものと承知している」と話した。